

八高古墳現場説明会資料

調査主体(株)イビソク

令和6年11月9日・10日

八高古墳は、現存の全長40mが前方後円墳(図1)で、これまで採集された埴輪などから古墳時代前期末から中期初頭に位置付けられています。今回の調査は名古屋市立大学のキャンパス再編整備プロジェクトに伴う発掘調査です。発掘調査は7月半ばから始まり、約4か月になり、これまでわかってきている成果の報告を行います。

発掘調査した結果、八高古墳の墳丘、周溝、周堤、渡り土手を確認しました。

成果1 墳丘に渡る土手を発見(図1・2中の①、写真1)

調査区の東側で、墳丘と周堤をつなぐ土橋状の施設が見つかりました。これは墳丘に至る道であり、渡り土手と呼ばれるものです。渡り土手を確認した事例は、名古屋市内では守山区の志段味古墳群の白鳥塚古墳(国史跡)があり、市内では2例目となります。

成果2 古墳を巡る葺石の葺かれた周溝と周堤の発見(周溝:図1・2中の②、写真②、周堤:図1・2中の③、写真③)

南側から西側に続く周溝を確認しました。この周溝の縁には拳よりやや小さい円礫が葺かれていました。この礫群を葺石と呼びます。葺石は白っぽい礫が多いように思われます。また東側の調査区外にも、この葺石は続き、八高古墳の周囲を巡ると想定できます。さらに西側の周溝の外側には周溝に沿って周堤が検出されています。この堤は削平をうけ幅約1m、高さ約0.3mほどとしか残っていません。周溝内には周堤が崩れた多くの土が堆積しています。

成果3 八高古墳の本来の規模が判明か(図1・2中の④、写真④)

調査区の北側の墳丘側にも葺石が見つかりました。特に東側の北壁沿いの調査区の葺石は非常に良く残っており、周溝の葺石と異なり、やや大きな礫を下部に敷き、その上部に小さな礫を積み上げていることがわかっています。墳丘側の葺石が東の調査区で確認されたことより、八高古墳の一部は削平を受けており、現状(現存長40m)より墳丘は大きかったと想定されます。

成果4 周溝から出土した埴輪(図3、写真⑤)

周溝内から埴輪が出土しています。特に墳丘に近い部分で多くみられ、周堤側では希薄です。このことから墳丘上を中心に埴輪は並べられていたことを物語っています。また埴輪のほとんどは円筒埴輪の破片です。なかには数は少ないですが、朝顔形埴輪や形象埴輪も出土しています。形象埴輪は蓋形埴輪の破片が出土しています。蓋は権力者が使用する「かさ」状のもので、権威の象徴と考えられています。

その他の成果(写真⑥~⑧)

今回の調査は八高古墳に伴う遺構を確認することが主目的ですが、古墳時代以外の時代の人が過ごした痕跡も見つかっています。八高古墳周辺に室町時代の人が生活した痕跡でみつきり、当時の人たちが使ったお茶碗や壺などがみつかりました(写真⑥)。古墳の周溝のあった場所に、周溝が埋まったあとの、江戸時代終わりころから明治時代の初めころに掘られた大きな穴の中からは、多くの焼き物を焼く際に使う道具、窯道具(写真⑦)が出土しています。この窯道具は学生会館の2階にも展示されているものと同じで、昭和40年代に当大学の学生が墳丘辺りでみつけたものです。このことから墳丘に窯が存在していたことが判ります。他に第八高等学校の寮で使われた井の蓋(写真⑧)も出土しています。

八高古墳の調査はこれからも続きます。大学構内の調査区東南端の掲示板、および大学のHPに調査の進捗の成果をこれからも公表していきますので、ご期待ください。

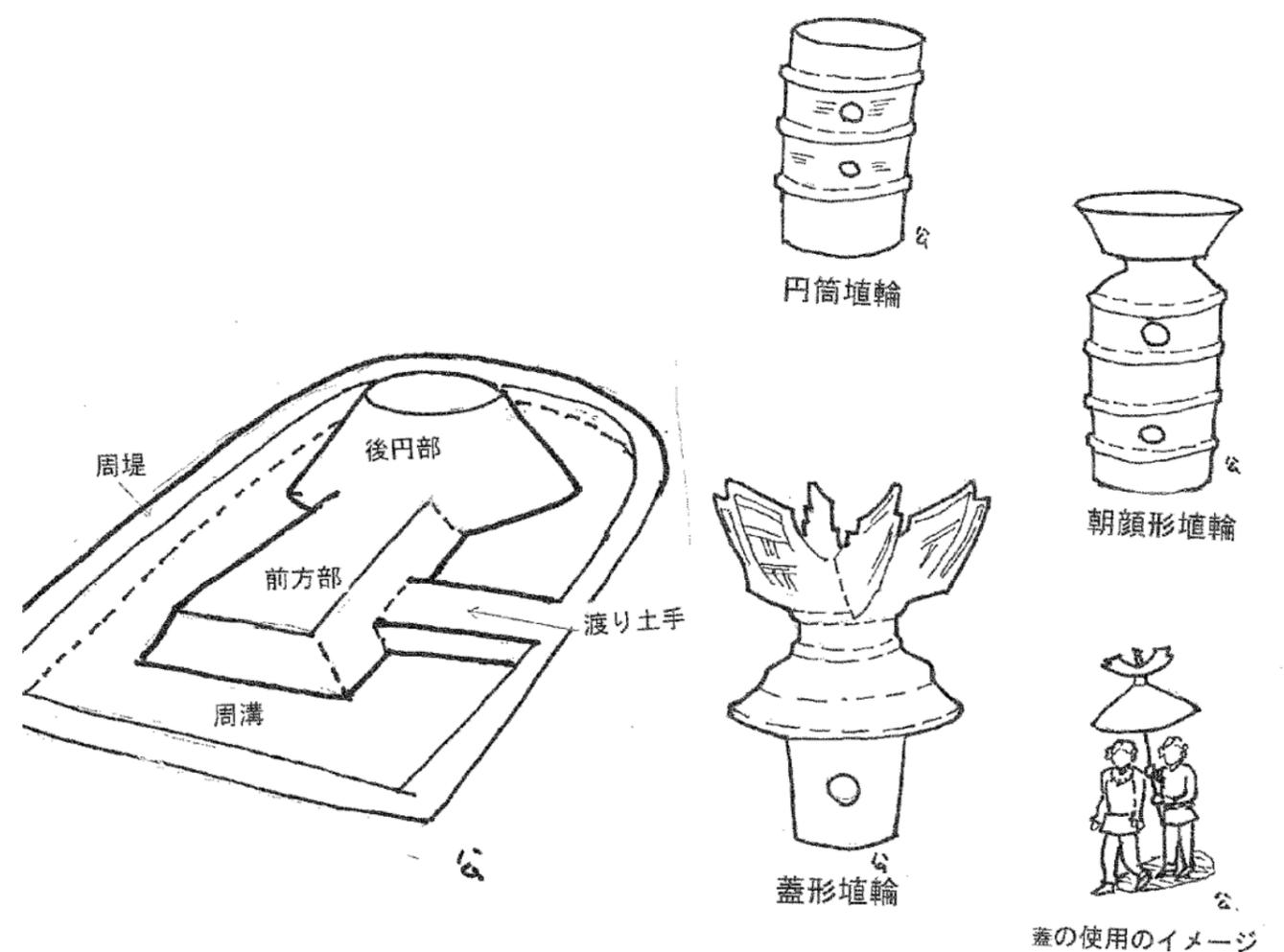
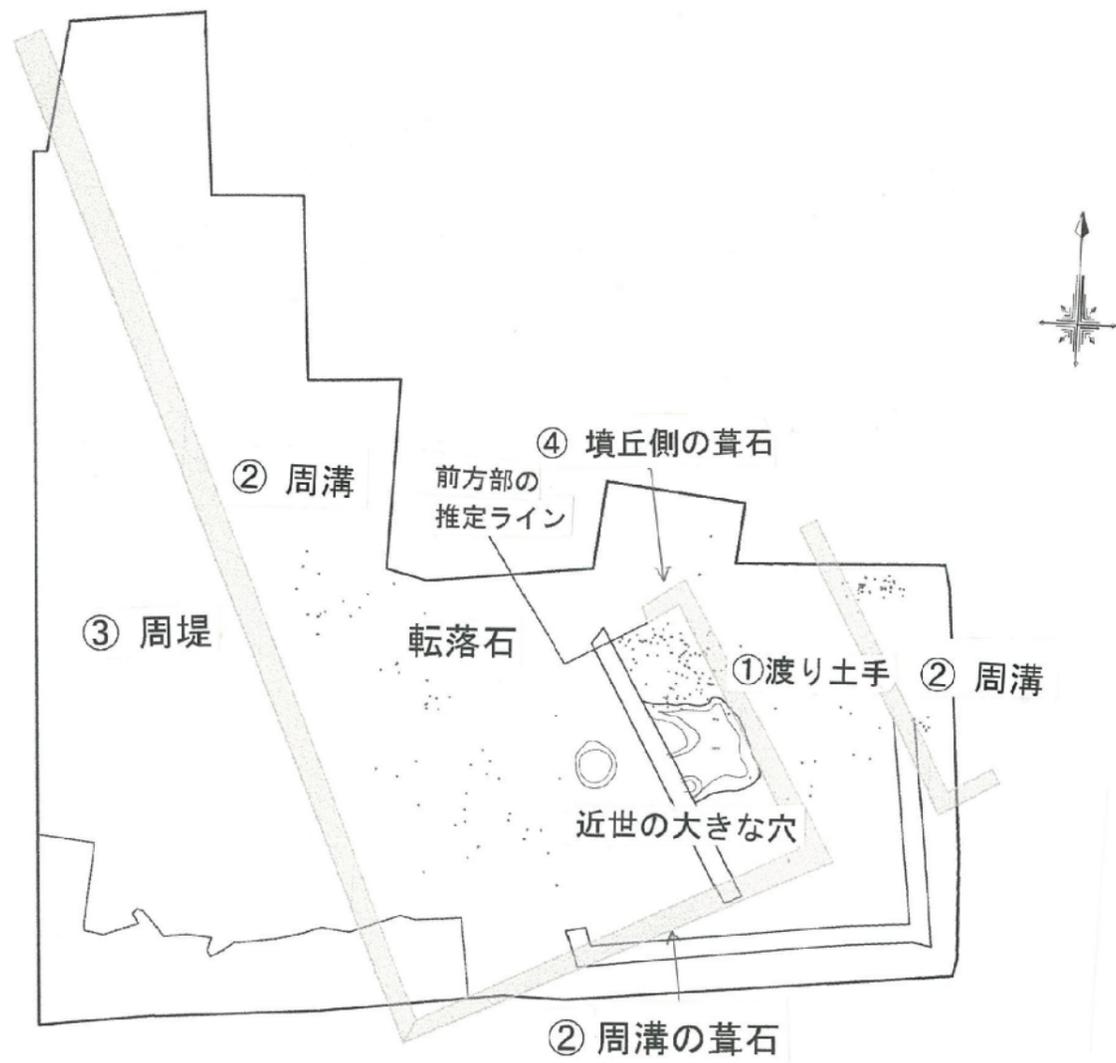


図1 前方後円墳のイメージ

図2 埴輪のイメージ

図3 八高古墳遺構概略図



④ 墳丘側の葺石



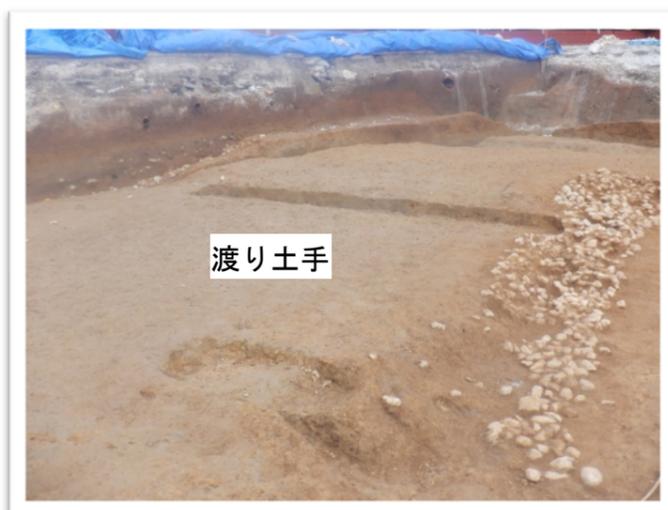
③ 周堤



⑤ 埴輪



⑥ 室町時代の穴と茶碗等



① 渡り土手



② 周溝



⑦ 窯道具等



⑧ 井の蓋